

ティフリスといった地名も見当たらない。第二版以降ではより充実した索引となっていることを期待する。

以上、若干の疑問や問題点を挙げたが、本書は全体として、精緻な史料読解の成果である豊富な事例を論拠として、＜アゼルバイジャン＞民族意識の形成過程を初めて本格的に示した画期的な著作である。「民族」や「国家」といった大きな問題に対する議論も、多くの示唆に富んでいる。旧ソ連圏やイスラーム地域を対象とする研究者だけではなく、広く「民族」に関心のある読者にとっても、本書は必読の一冊となるだろう。

＜参考文献＞

大塚和夫他編 2002 『岩波イスラーム辞典』 岩波書店。

小松久男他編 2005 『中央ユーラシアを知る事典』 平凡社。

Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Thum, Rian. 2014. *The Sacred Routes of Uyghur History*. Cambridge, MA: Harvard University Press,.

Unno-Yamazaki, Noriko. 2016. “Under Crescent and Full Moons: Contradiction and Coherence of Muslims in Beijing 1906–1913.” Unpublished doctoral dissertation, The University of Tokyo.

(海野 典子 日本学術振興会特別研究員)

Kazuyo Murata. 2017. *Beauty in Sufism: The Teachings of Rūzbihān Baqlī*. Albany: State University of New York Press, xiii+198pp.

本書は、12世紀イラン南部の都市シーラーズで活躍したスーフィー、ルーズビハーン・バクリー・シーラーズィー (Rūzbihān Baqlī Shīrāzī, d. 1128–1209) の、美に関する議論を中心に、スーフィズムにおける美の議論について論じたものである。

一見すると、スーフィズム・美・ルーズビハーン、という同書のタイトルから、いわゆるイラン的スーフィズムに典型的に見られる陶醉系スーフィーが展開した甘美な議論について取り扱った研究書であるかのような印象を受けるが、その内容は実に多岐に渡っている。同書は『スーフィズムにおける美』と銘打ってはいるものの、スーフィズムに関連して、哲学、神学などにおける美の議論の変遷なども丁寧に説明しており、筆者の広い視野と関心とを十全に反映した内容構成となっている。序章において筆者は、同書において1) なぜルーズビハーンは美についてこれほどまでに語ったのか、2) 彼の神理解、世界観、人間観において美の持つ意味とは何か、3) 神的美はどのように被造物の中の美と対比されるのか、4) 世界と人間の創造の過程において美の持つ意味とは何か、と言った具合に、12もの質問が投げかけられると述べており (p. 3)、無限に湧いてくる美に関する筆者の好奇心が同書の執筆の一番の動機であることは疑いようがない。

以下が全5章から成る同書の概要である。

第1章「美についての議論」

第2章「美をめぐる言説」

第3章「美の神学」

第4章「美の人類学と美の宇宙論」

第5章「美の預言者論」

第1章は、イスラームにおける美の議論に関して特に貢献したとされるスーフィーと哲学者の議論から美についてを検討している。分野としては哲学・スーフィズム・神学に属する3つの主要な学派の議論を検討しているが、この3者を分ける線は明確ではないとして、3者が混在する形で様々な観点から美に関する議論を収集し、紹介している。まずはクルアーン、ハディースに表れる美に関する議論を紹介し、その後順に存在論、神学、宇宙論、宇宙生成論、倫理と高潔さ、美と愛の精神、美と喜びの精神、美と悲壮の精神の

各々の観点から美についての見解を提示している。取り扱っている分野の広さもさることながら、第1章ではファーラービーからイブン・アラビーまでという非常に長い時間軸から、美についてを整理しようと試みている。種々の分野と長い歴史とを通し、イスラーム世界における美に関して共通に言えることというのは、第1章における筆者の検討に基づけば以下である。つまり、多くの思想家にとって、美の追求とは神を求める事であり、そのような意味で哲学者や神学者、スーフィーにとって美的な経験というのは神の徴を思い出させる経験なのである、という美に関する普遍的な法則である。イスラーム世界における美に関して語る際に最も根源的であるのは、すべての美は美しい創造主そのものに由来するという真理である (pp.25-26)。

第2章「美をめぐる言説」では、ルーズビハーンの語る美についてを理解するために必要な基礎知識として、クルアーンとハディースにおいて美はどのように取り扱われてきたのかを紹介している。フスンとジャマールがこの章において中心的に取り扱われる2つのキタームである。クルアーンやハディースにおいて、フスンの語が、神からムハンマド、人間一般、神のすべての被造物に至るあらゆる存在の美を示すために使用されていることがここで再確認され、一方ルーズビハーンの美の議論においては、フスンの語は神がムハンマドに対して顕現した際の描写として使用されていることが指摘されている。またジャマールの語はクルアーンにおいてはフスンよりも下位に置かれ、ルーズビハーンもまたクルアーンの傾向に従っている。2章の前半部では、美という語に焦点が当てられているが、後半部では美を醜さという反義語から検討するという手法によって、よりルーズビハーンの美の議論が意味している美の存在論的意義についてを明瞭に描き出している。

第3章「美の神学」では、神学の観点からルーズビハーンの美学を概観する。前章に引き続き、ここでもフスンとジャマールがキタームであり、このキタームを中心に議論が展開されている。ルーズビハーンの神学における、1) 神のジャマールとフスンの違いは何か、2) ルーズビハーンの神学の枠組みにおいてこの2つはどこに位置づけられるのか、3) そもそも彼の神学的枠組みとは何か、という質問に答えるべく (p.50)、ルーズビハーンのテキストのうちでも唯一、神学的な議論を含んでいる、『神の唯一性の道』(Masālik al-tawhīd) を使用している。『神の唯一性の道』においては、ルーズビハーンのアシュアリー学派神学に関する見識の深さを窺い知ることが出来る。同書を用いたルーズビハーンの神学的観点からの美学の検討の結果、筆者によればルーズビハーンの美学においては以下のことが主張されているという。ルーズビハーンは、創造とは、知られ得ない神の本質の自己顕現の過程であると考えている。それは、隠された宝であった神が露呈していく過程と一致する。神が世界を創造した力の源泉というのは、神の神自身の美への愛で、隠されたまゐるよりも、この美しさを知られたいと望んだ神の欲望なのである。ルーズビハーンもまたこのような意味で神の隠された宝のハディースと美との関係を重視しているのである (p.73)。

続く第4章、「美の人間学と美の宇宙論」では、神と人との美を通した関係性について説明している。神は美しく、故に神の被造物もまた美しいのであるとすれば、世界の創造における美の役割とは何であるのか、美に関して人間の役割とは何であるのか、何が物を美しくするのか、なぜ美の受容は喜ばしいのか、といった疑問に基づき議論が進められている。ルーズビハーンの美の議論においては、神と人との美を通した関係性は創造時にまで遡る。宇宙というのは神の御業なのであるから、神の創った美しいものの中に神的美は見出され、この被造物を通して顕れている神的美は、最終的に神という美の根源に戻るための方法となり得るのである。

さて、人間が被造物として顕れている神的美を目の当たりにしたいと望むのであれば、自我から清くあり、神の美称をその身に具現化することが求められる。この方法を指導するのが預言者なのである。つまり預言者は、神的美の道のエキスパートとしてこの世に存在するのである。最終章である第5章「美の預言者論」では、人間の中でも美に関して卓越している預言者らを紹介している。例えば、アアダムは普遍的な人的美的シンボルとして存在するのであり、ユースフは、彼自身が神的美をその身に顕わにした美しい預言者である。ムーサーは、神的美の顕現の目撃者であり、イブラーヒームは神的美との親密な関係を築いた。そして預言者ムハンマドこそは、最も美しい預言者として美に関して最も高い地位に置かれるのである。美に関し、人間は平等であるとルーズビハーンは説いているのではなく、預言者のような神の選良が美において優越しているのである。

以上の検討を通し、同書におけるルーズビハーンの美学の検討の結果として明らかとなった最も重要な点

は、ルーズビハーンの美学に関する言説は1) クルアーンとハディースの言葉、2) スーフィズム用語、3) 神学の教義の用語、4) 哲学などその他の教義からの用語、5) ルーズビハーンに独自の用語、の混淆の結果であるという事実である。同書は各章の終わりに小括が付き、最後に結論を設けないというスタイルを採用していることから、筆者が同書における検討を通し、最終的にどのような見解を持つに至ったかを知ることが困難であることが悔やまれるが、同書の検討によって指摘された最も重要な点は、上記であると評者は考える。特に同書はこれまでの研究ではなおざりにされていた、ルーズビハーン思想における神学の観点が組み込まれていることで、上記のような多角的視点からの検討を可能にしたといえる。美学というテーマに限った議論であったとはいえ、同書がルーズビハーン思想研究にもたらし得る重要な示唆というのは正にこの多角的な視点である。筆者は今後もルーズビハーン思想に関する研究書の刊行を予定しているが、筆者の持つ幅広い知識が、ルーズビハーン思想研究のみならず、イスラーム思想研究に対してもたらすインパクトは疑いようもなく大きなものであろう。ルーズビハーン思想について見識を深めたいという動機だけでなく、広くイスラームにおける美学について知見を得たいと考える読者にも是非手に取ってもらいたい一冊である。

(井上 貴恵 東京大学大学院人文社会系研究科)

鷹木恵子『チュニジア革命と民主化——人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』明石書店 2016年 530頁

本書は、2011年に同国で起きた反体制運動とその後の民主化移行の「過程」を文献資料や現地での膨大な聞き取りを中心として跡付けた壮大なモノグラフである。中東・北アフリカ諸国の大政治変動の発端となったチュニジア革命は、中東現代史において極めて重大な出来事であった。海外の研究では、経済・歴史・ジェンダーなど様々な観点からチュニジアの民主化が論じられているが、日本においてその数は決して多いとはいえない(14-15頁)。

正直なところ、「チュニジア革命と民主化」と「人類学的プロセス・ドキュメンテーション」が結びついた題名を目にして以来、評者は不思議な思いに捉われていた。なぜなら、「チュニジア革命と民主化」という政治学研究のようなタイトルの本書と、著者がチュニジアで長年に渡って行ってきた文化人類学的研究には、親和性が感じられなかったからである。これまで著者が研究対象にしてきたのは、チュニジア南部の小さな村の聖者信仰やナツメヤシ民族文化など相対的に「ミクロ」な存在であった。

とはいえ、2007年の前著『マイクロクレジットの文化人類学——中東・北アフリカにおける金融の民主化にむけて』では、これまでの研究とは異なる傾向が見られた。同書では、マイクロクレジットを利用する女性個人、そして彼女らが属する地域コミュニティという「ミクロ」や「メゾ」の事例から、経済的弱者救済のための制度がマグレブ諸国に浸透しつつあるという「マクロ」の指摘がなされている。同様に本書においても、「ミクロ・メゾ・マクロ」レベルの議論が行なわれているが、前著のように「ミクロ」から実証を積み上げ「メゾ・マクロ」に至る一方通行的なものではない。著者はチュニジア革命を「一つの壮大な民衆参加型の壮大な社会開発プロジェクト(20頁)」と捉え直し、「ミクロ・メゾ・マクロのレベルをつなぐ試み(22頁)」、すなわち、インタラクティブな営為によって「多面性・多声性・多所性(21頁)」を抱える現象のプロセスを明らかにしている。

本書の構成は以下の通りとなっている。

- 序章 なぜチュニジア革命か
- 第1章 「二つのチュニジア」と革命の背景
- 第2章 チュニジア革命の始まりとベンアリー政権の崩壊
- 第3章 革命後の民主化移行と制憲議会選挙でのナフダ党勝利
- 第4章 ナフダ党連立トロイカ政権からカルテット仲介の「国民対話」へ